

Sir Gawain and the Green Knight の語彙

The Vocabulary of *Sir Gawain and the Green Knight*

野呂俊文

(Toshifumi Noro)

中英語の作品の中でも *Sir Gawain and the Green Knight* (以下 *Gawain* と略す) の語彙はチョーサーなどの作品の語彙とはかなり異なっている。たとえばチョーサーの *Troilus and Criseyde* では同じ重要語が何度も繰り返し使用されているため比較的平易な表現となっているが、それに対して *Gawain* では前置詞などの機能語を別にすれば、同一語が反復して使用される頻度が低く、同じ意味を表すにも様々な同義語が使い分けて使用されているため、語彙の点で現代の読者にとってはより読みにくい作品となっている。チョーサーの英語がロンドン英語であるのに対して、*Gawain* をはじめとする Alliterative Revival に属する頭韻詩の多くが、West Midlands の方言で書かれていることも、その語彙を難しくしている一因である。

Gawain ではチョーサーなどと比べて、より多様な語彙が使用されている。作品中で1度だけ使用されている語も多く存在する一方で、かなり頻繁に使用されている重要語のようなものも存在する。そのような重要語について概観してみたい。その際、現代英語には残っていない語で、しかもチョーサーには見られない語であることを基準として取り上げた。ここでは *Gawain* で使用されている主要な名詞の同義語と、それ以外の名詞、および形容詞、副詞でチョーサーでは使用されていない語を中心にして、作品中で5回以上使用されている語を取り上げたい。これらの品詞の語は文中で通常強勢を受ける語であり、頭韻語として使用される割合が高いため、頭韻語として使用されている割合についても調査した。

Gawain の語彙の中でチョーサーには見られない語は、頭韻詩に特有の語であることが多い。そういった頭韻詩特有の語は頭韻語として使用される割合が当然高く、また Marie Borroff によれば、「頭韻詩のそのような伝統的語彙の古語的で詩的な要素は文体を格調高いものにするのに役立っている」(the archaic and poetic elements of the traditional vocabulary of alliterative poetry serve to elevate the style) (p.93) のであるという。Borroff が

The historical study of style reveals that in *Sir Gawain and the Green Knight*, the verbal expression of the story is thoroughly traditional, to an extent that is more and more fully apparent as one becomes more familiar with the other extant works belonging to the same tradition. (p.129)

と述べているように、*Gawain* に見られる頭韻詩特有の語は伝統的なものであって、他の頭韻詩の作品にも見られることが多いのである。

まず、*Gawain* ではいくつかの同義語が使用されているので、それら同義語のいくつかを見ていきたい。ここで取り上げるのは「男、騎士」、「馬」、「大地」、「広間」を表す名詞である。

なお、使用した主なテキストは

Tolkien, J. R. R. and E. V. Gordon, ed., Second Edition revised by

Norman Davis, *Sir Gawain and the Green Knight* (Oxford U. P., 1979)

Skeat, Walter W., ed., *The Complete Works of Geoffrey Chaucer* in 6 vols. (Oxford U. P., 1894, 1972)

Klaeber, F., ed., *Beowulf and The Fight at Finnsburg* (Heath, 1950)

Krishna, Valerie, ed. *The Alliterative Morte Arthure* (Burt Franklin, 1976)

Duggan, Hoyt N. and Thorlac Turville-Petre, ed., *The Wars of Alexander* (Oxford U. P., 1989)

である。同じ語が他の頭韻詩である *The Alliterative Morte Arthure* や *The Wars of Alexander* でも使用されているかどうかを調査して記載したが、その場合は、上記のテキストによった。以下では、これらの作品は *Morte Arthure* および *Alexander* のような省略形で示した。また、中世北欧語では、古ノルド語 (Old Norse) と古アイスランド語 (Old Icelandic) とはほとんど同じであるが、Zoëga の古アイスランド語辞典を参照した場合には、古アイスランド語と記した。なお、使用した略語については、ME=Middle English, OE=Old English, ON=Old Norse, OF=Old French であり、*OED* による年号で a1200 や c1200 などの a は ante (～より少し前)、c は circa (およそ～ごろ) の意味である。

「男、騎士」を表す同義語

Gawain においては「男、騎士」を表す様々な同義語が使用されている。頭韻詩であるこの作品に特徴的な語は、burn(e), frek(e), gome, hapel, leude (lede), renk, schalk, segg(e), tulk (tolke), wy3(e) の 10 語である。Borroff (p.53) が Brink の著作に言及しながら述べているところでは、「男、騎士」を表す語のうちで、これらの 10 語は頭韻語として使用される頻度の高い語、すなわち high alliterative rank に属す語であり、一方、king, knight, lord, mon, syr(e) は頭韻語として使用される割合が比較的低い語、すなわち low alliterative rank に属す語であるという。Lester (p.104) によれば、前者の 10 語が頭韻詩以外で使用されることはほとんどなかったという。これらの語はチャオサーには見られない語であり、また今日では標準英語としてはすべて廃語となっている。反対に、後者の 5 語はチャオサーによって使用されており、現代英語にも残っている語である。

チャオサーでは使用されていない前者の 10 語について、*Gawain* において頭韻語として使用されている回数と、非頭韻語として使用されている回数とを調べたのが次の表である。(h- で始まる hapel に関しては、母音で始まる語との間で頭韻を踏むものとして数えた。また、語が bob and wheel で使用されている場合

も、同様に数えた。)

単語	使用回数	頭韻語	非頭韻語	頭韻語の割合	語源
burn(e), buerne	46	46	0	100%	OE
frek(e)	30	29	1	97%	OE
gome	21	21	0	100%	OE
hæpel	25	25	0	100%	OE
leude, lede, lude	37	37	0	100%	OE
renk	11	11	0	100%	OE
schalk	7	7	0	100%	OE
segg(e)	28	28	0	100%	OE
tulk, tolke	8	8	0	100%	ON
wy ₃ (e), wyghe	47	45	2	96%	OE

参考までに、現代英語に残っていて、かつジョーサーでも使用されている「男、騎士」を表す 5 語についての *Gawain* での頭韻語としての割合は次の表の通りである。mon (=man) に関しては、代名詞用法もあるため、便宜上複数形の men, menne についてのみを数え、また sir に関しては、*Sir Gawain* などのように固有名詞の前に称号として付けられた用法は除外して、単独の名詞用法のみを数えた。

単語	使用回数	頭韻語	非頭韻語	頭韻語の割合	語源
kyng(e)	31	23	8	74%	OE
knyzt, kni ₃ t	84	52	32	63%	OE
lord(e)	57	42	15	74%	OE
men, menne (pl. のみ)	20	12	8	60%	OE
syre, sir	16	9	7	56%	OF

上記の二つの表から、後者の表に見られる現代でも使用されている口語的な語の場合、頭韻語としての割合が大体 60~70% くらいであるのに対して、前者の詩的で古風である “elevated words” と Borroff (p.85) が呼ぶ語では、頭韻語の割合が 100% に近いという点で、両者の語彙にははっきりとした使用上の違いがあることが見て取れる。前者の high alliterative rank に属す語がすべてチョーサーには見られない語である点も興味深い。これらの 10 語を次に取り上げて概観しておきたい。

burn(e), buurne

þe *burne* bode on blonk, þat on bonk houed (785)

Of þe depe double dich þat drof to þe place;

騎士は馬上で立ち止まり、馬は館を取り巻く深い二重の濠の堤で待った。

burn(e) は *OED* では *berne* の見出しのもとに記載されている語で、*Beowulf* でも *beorn* (男、英雄、戦士) として使用されている。burn(e) は 13 世紀から 16 世紀にかけてみられる綴りである。この語は OE の *beorn* (初期の形は *biorn*) に由来し、「戦士、英雄、勇者」(warrior, hero, man of valour) を意味し、後には「男」(man) の意味の詩語の一つとして使用されるようになった。ME では様々な形が存在するが、14 世紀に中部地方で最も一般的であった形は burn(e) であった。1400 年以降は、使用は主に北部に限られるようになり、頭韻詩で好んで用いられた。スコットランド方言においては *berne* という形で、1550 年以降になるまで存続した。OE の *beorn* の時代からもっぱら詩語として用いられた語で、散文で使用されることはなかった。*OED* の最後の用例は 1528 年のものである。

この語は *Morte Arthure* と *Alexander* では *berne* 形で使用されている。

frek(e)

þen feersly þat oþer *freke* vpon fote lyztis. (329)

すると相手の男は高慢に馬から下りた。

freke は OE の freca に由来し、*Beowulf* でも「戦士」の意味で使用されている。この語は「熱望している」という意味の形容詞 freck の名詞形であった。したがって、freke は本来「戦いを熱望している者」すなわち「戦士」(warrior, champion) を意味するが、通常は「男」(man) を表す詩語の一つとして用いられた。*OED* の最後の用例は a1605 年のものである。

この語は *Morte Arthure* と *Alexander* でも使用されている。

gome

Wel gay watz þis gome gered in grene, (179)

この男は実に派手に緑の衣を着ていた。

gome は OE の guma に由来し、*Beowulf* でも「男」の意味で使用されている。この語はゲルマン諸語に広く分布しており、「人」を表すラテン語の homo とも同一語源の語である。OE の時代から詩語として用いられ、16 世紀まで使用された。bridegroom (花婿) の古い形の bridegome にも含まれている。*OED* の最後の用例は 1515 年のものである。

Gawain ではこの語は「男、騎士」の意味で用いられている。*OED* は定義として “a man” のみを挙げているだけであるが、*MED* では (1) 「男」、(2) 「戦士」、(3) 「男の召使い」、(4) 「男の子」(a male child)、(5) 「人、人々」(a person; pl. people) などの意味を挙げている。

この語は *Morte Arthure* と *Alexander* でも使用されている。*Morte Arthure* では gome と並んで gume 形も使用されている。

hapel

The *hapel* heldet hym fro, and on his ax rested, (2331)

男は彼から目をそらし、斧に寄りかかった。

OED では hathel の見出しで記載されている語である。hathel は athel の別形で、*MED* によると両者は混同されることがあったという。Lester (p.93) は

ME の *hathel* (男、戦士) が OE の *hæleð* (戦士) と *æðel* (高貴な) の混成であるかもしれないと述べている。

OED での用例は 14 世紀中頃から 15 世紀にかけてのものに限られる。主に頭韻詩で用いられた語である。ただ、別形 *athel* の方は OE でも *æðelu* の形で存在し、*Beowulf* では「高貴な血筋、気高さ」の意味で用いられている。

Gawain では両方の形が用いられており、Tolkien and Gordon 編のテキストでは *hapel* が名詞、*athel* (*apel*) の方が形容詞と解釈されている。この点で、*athel* を名詞の意味にも取っている *OED* や *MED* の解釈とは異なっている。*MED* は、「男、戦士」、「貴族」(*nobleman*)、「神」の定義を挙げている。*Gawain* では「騎士」、「主人」、「神」などの意味で用いられている。

この語は *Morte Arthure* と *Alexander* でも使用されている。

leude, lede, lude

þe leude lystened ful wel þat lez in his bedde, (2006)

寝床に横たわっていた騎士はよく耳を澄ませた。

leude, lede, lude は *OED* の見出しでは *lede* として記載されている。OE 由来の語で、古アイスランド語 *lýðr* (人々) やドイツ語 *Leute* (人々) とも同一語源の語である。*Beowulf* では *leod* (人; 人々) の形で使用されている。

OED によると、異なるが密接に関連した三つの OE の語に由来するという。それらは、(1) *léod* (fem. nation, people), (2) *léode, léoda*, Northumb. *líoda* (pl., men, people), (3) *léod* (str. masc., man) であり、(3) *léod* は「王」を表す詩語および *burhléod* (-*líod*) (=burgher), *landléod* (=inhabitant) の複合語においてのみ現れる語であるという。

OED が挙げている定義は、(1)「民族、(集合的に)人々」、(2)「(複数で)人々; 家臣たち; 同胞」、(3)「(単数で)男、人; 家臣の一人; (OE の詩語として) 君主; 人への呼びかけ」などである。*Gawain* では「人、騎士、君主」の意味で使用されている。

この語は *Morte Arthure* と *Alexander* でも使用されている。

renk

Now ridez þis *renk* þurȝ þe ryalme of Logres, (691)

今やこの騎士はログレスの国を通り馬を進める。

renk は *OED* では *rink* の見出しで記載されている語で、*Beowulf* でも *rinc* (男、戦士) として使用されている。*renk* は 14 世紀から 16 世紀にかけて見られる形。詩語としてのみ使用された語で、「男、戦士、騎士」を意味した。また、*Patience* (323) では「神にたいする呼びかけ」として使用されている。

この語は古アイスランド語 *rekr* (=man, warrior) などと同一語源の OE *rinc* に由来し、形容詞 *rank* (=proud; stout, strong) の母音交代 (ablaut) による別形であるとされる。この形容詞 *rank* は今日「繁茂した」の意味で残っている語であり、*Gawain* では使用されていないが、*Morte Arthure* では “strong, noble, stout” の意味で何度も使用されている。

schalk

Þat þe scharp of þe *schalk* schyndered þe bones, (424)

それで男の鋭い武器は骨を打ち砕いた。

schalk は *OED* では *shalk* の見出しで記載されている語で、*Beowulf* でも *scealc* (家来、戦士、男) の形で使用されている。*schalk* は 14 世紀から 16 世紀にかけてみられる綴り。OE *sc(e)alc* (=servant) に由来し、古アイスランド語 *skálkr* (=servant; rogue) をはじめゲルマン諸語に広く同一語源の語が存在する。

元来、「召使い、家来」を意味した語であるが、頭韻詩においては詩語として「男」を意味する同義語の一つとして用いられた。*MED* は、「男; 人、人間」、「戦士、騎士; 王」、「召使い、家来」などの定義を挙げている。*OED* による最後の用例は 1508 年のものである。

この語は *Morte Arthure* と *Alexander* でも使用されている。

segg(e)

And as sadly þe *segge* hym in his sadel sette (437)

As non vnhap had hym ayled,

騎士はなんら悲運を被らなかつたかのように、しっかりと鞍に座っていた。

OED では *segge* の見出しで載っている語で、語尾 *e* のない *segg* の方は 14 世紀にみられる綴り。古アイスランド語の *seggr* (=man 詩語) などと同一語源の OE *secg* に由来する語で「男」を意味する詩語として使用され、*Beowulf* でも *secg* の形で使用されている。

MED は「男; 人; (複数) 人々」の定義を挙げていて、主に頭韻詩の用例を挙げている。*Gawain* では「男、騎士; 人々」の意味で用いられている。*OED* による最後の用例は 1567 年のものである。

この語は *Morte Arthure* と *Alexander* でも使用されている。

tulk, tolke

Bot I wyl to þe chapel, for chaunce þat may falle,

And talk wyth þat ilk *tulk* þe tale þat me lyste, (2133)

私は、どんな運命がそこで訪れようとも、その礼拝堂に赴き、その男と私の話したい話をするつもりだ。

OED では *tulk, tolk* の見出しで記載されており、一般に古ノルド語 *túlkr* (=interpreter, spokesman) に由来すると考えられている語である。しかしこれと ME の頭韻詩で一般的な意味「男」とを結びつけるつながりは解明されていないと *OED* は記している。

この語に *OED* は「男」(a man) の定義を与えているだけであるが、*Gawain* では「男、騎士」の意味で用いられている。*MED* は「男; 戦士、兵士」の定義を与え、「神」に関しても用いられるとしている。

この語の用例はそれほど多くないようで、*OED* は 4 作品 (すべて頭韻詩) か

ら 6 例を引用しているのみである。また *MED* が挙げている 10 個の用例もすべて頭韻詩からのものである。この語は *Gawain* では 8 回使用されており、また *Alexander, Cleannes, Destruction of Troy, Erkenwald, Piers Plowman* などでも使用されているが、*Morte Arthure, Siege of Jerusalem, Patience, Pearl* などでは用いられていない。*Patience, Pearl* は内容の点から、この語を使用する必要が無かったとも考えられるが、*Morte Arthure* では他の 9 個の「男、騎士」の同義語がすべて使用されているにもかかわらず、この *tulk(e), talk* だけが使用されていないことは特筆すべきことであるかもしれない。他の同義語が OE に由来するのに対して、*tulk(e) (talk)* のみが北欧語からの借用語であることとも関係しているかもしれない。なお、頭韻詩で用いられる「男、騎士」の同義語としてここで取り上げている 10 語について、この *tulk(e) (talk)* 以外はすべてが *Morte Arthure* および *Alexander* の両方で使用されている。

OED が挙げている用例は主に 14 世紀のもので、最後の用例は c1400 年のものである。

wy3(e), wyghe

At vche warþe oþer water þer þe wy3e passed (715)

He fonde a foo hym byfore,

騎士が浅瀬や流れを渡るたびに、目の前に敵を発見した。

OED では *wye* の見出しで、*MED* では *wi(e)* の見出しのもとに記載されている語である。*wy3(e)* は 14 世紀に、*wyghe* は 14 世紀、15 世紀に見られる綴り。OE *wiga* に由来する語で、主に OE で用いられ、*Beowulf* でも「戦士」の意味で使用されているが、ME では詩語としてのみ用いられた。*MED* の用例がすべて頭韻詩からのものであり、主に頭韻詩で用いられた語であると考えられる。

Gawain では「男、騎士」、「人」、「呼びかけの語」、「(複数で) 人々」などの意味で用いられている。

OED は (1) 「戦士、兵士」、(2) 「高貴で強壮な男、男、人」、(3) (まれ) 「婦人」などの定義を挙げている。特に、(2) の用法は 1340 年頃から 1420 年頃に

かけてはきわめてしばしば見られるという。また (2) には呼びかけ語としての用法や、「神」を意味する場合もあった。

一方、*MED* では「(性別にかかわらず) 人; 男」、「戦士; 騎士; 家来」、「神を指す用法」、「(通常敬意を表す、あるいは親しみを表す場合もある) 呼びかけの語」、「(騎士に相当する) 高貴な生まれの女性 (noblewoman)」などの定義を挙げている。

OED による最後の用例は 16 世紀のものである。この語は *Morte Arthure* と *Alexander* でも使用されている。前者では wy(e) という形で、後者では we(e), wy という形で使用されている。

「馬」を表す同義語

「馬」に関する同義語では、high alliterative rank に属す語として blonk と fole (=foal) があり、low alliterative rank に属す語として hors と stede (=steed) がある。これらの語の *Gawain* における頭韻語としての割合は次の表の通りである。

単語	使用回数	頭韻語	非頭韻語	頭韻語の割合	語源
blonk	8	7	1	88%	OE
fole	5	5	0	100%	OE
hors, horce	12	7	5	58%	OE
sted(e)	5	4	1	80%	OE

これらのうち、上の 2 語 blonk と fole はチャーサーには見られない語であり、下の 2 語 hors と stede はチャーサーも使用している語である。fole (=foal) は今日では「子馬」の意味で使用されている語であるが、この「子馬」の意味における使用もチャーサーには見られない。ここでも hors, stede より、チャーサーには見られない blonk, fole の方が、頭韻語として使用されている割合が高

いことが分かる。

blonk

And syþen boʒez to his *blonk*, þe brydel he cachchez, (434)

そして次に彼は馬の方に向かい、手綱を取った。

blonk は OE *blanca*, *blonca* に由来し、OE ですでに「馬」を意味する語として *Beowulf* でも使用されている。この語はもともとは「白い」を意味し、古高地ドイツ語の *blanc ros* (=white horse) に見られるように、元来「白馬」の意味であったが、OE の時代から色に関係なしに「馬」を表す同義語の一つとして使用された。

OED は *blonk* の定義で “Poetic word for ‘horse’; steed” と記して、この語が詩語であることを明確にしている。*MED* には主に頭韻詩からの用例が挙げられている。*OED* による最後の用例は 1535 年のものである。

この語は *Morte Arthure* と *Alexander* でも使用されている。

fole

Such a *fole* vpon folde, ne freke þat hym rydes, (196)

Watz neuer sene in þat sale wyth syʒt er þat tyme,

そのような馬も、それを乗りこなす男も、それまでその広間で見られたことは決してなかった。

OED が *foal* の見出しで記載している語で、OE *fola* に由来し、ゲルマン諸語に広く見られる語で、ドイツ語 *Fohlen* (子馬) とも同一語源の語である。現代英語の *foal* に見られるように、「子馬」が OE の時代からの基本的な意味であった。*Beowulf* ではこの語は使用されておらず、*OED* の初出例は c950 年の *Lindisfarne Gospels* である。

Gawain では、「子馬」の意味の用例はなく、すべて「馬」を意味する同義語の一つとして使用されている。*OED* のこの意味の用例は主に 14 世紀のもので、

最後の用例は 1513 年のものである。*MED* は「軍馬」、「(乗馬用、狩猟用) 馬、農耕馬」の定義を与えている。

この語は *Morte Arthure* と *Alexander* でも使用されている。

「大地」を表す同義語

「大地」を表す同義語では、high alliterative rank に属す語として *erde*, *folde*, *molde* があり、low alliterative rank に属す語として *erþe*, *grounde*, *londe* がある。前者の *Gawain* における使用回数と、頭韻語の割合は次の表の通りである。

単語	使用回数	頭韻語	非頭韻語	頭韻語の割合	語源
<i>erde</i>	6	6	0	100%	OE
<i>folde</i>	10	10	0	100%	OE
<i>molde</i>	4	4	0	100%	OE

一方、後者については次の表の通りである。

単語	使用回数	頭韻語	非頭韻語	頭韻語の割合	語源
<i>erþe</i> , <i>erthe</i>	13	0	13	0%	OE
<i>grounde</i>	9	6	3	67%	OE
<i>londe</i>	12	10	2	83%	OE

前者の表の語は、チャーサーには見られない語であり、後者の表の語はチャーサーによっても使用されている語である。

これらの表から、前者の *erde*, *folde*, *molde* が 100 パーセント頭韻語として使用されているのに対して、後者の *erþe* (*erthe*), *grounde*, *londe* では頭韻語の割合がそれよりも低いことが見て取れる。特に、*erþe* (*erthe*) の場合は、すべ

てが行末で使用されていて、非頭韻語であるのに対して、erde の場合、行末で使用されている例はなく、すべてが頭韻語として使用されていることは特筆すべきことである。特に、erde と erþe という形の似た語の間で、*Gawain* では前者は頭韻語、後者は非頭韻語という使い分けがされていることが分かる。

Alexander においてはこれほどははっきりしていないが、erde は頭韻語としての割合が高く、erth(e) はそうではない。*Morte Arthure* では erde は使用されておらず、erth(e) のみが現れるが、erth(e) の 82 回の使用例のうち、13 回くらいが頭韻語として使用されているだけで、erth(e) の頭韻語としての割合は低いことが分かる。

erde

And I am here an erande in *erdez vncoupe*, (1808)

そして私は知らぬ土地に使命をおびて来ています。

erde は *OED* では erd の見出しで記載されている語であり、OE eard に由来し、この語は *Beowulf* でも「土地、地域、住まい」の意味で使用されている。

MED は (1) 「故郷、故国; 住まい、我が家」、(2) 「国、地域」、(3) 「(人が住む場所としての) 大地; 地上の人々; 陸地; 地面; 土壌; (神がそれで人を造った) 土」などの定義を挙げている。*OED* による最後の用例は *Gawain* からのものである。*Gawain* では「土地、地域」(land, region) の意味で使用されている。

erde に形と意味の似た erþe (=earth) は OE eorðe に由来する。erde とは別語であるが、13 世紀から 15 世紀にかけて北部では、erd(e) という形もあったため、erde と混同されることがあったと *OED* は述べている。なお、eorðe (大地) は *Beowulf* でも使用されている。

すでに見たように、erde は *Morte Arthure* では使用されていないが、*Alexander* では使用されている。

folde

He dryues wyth droȝt þe dust for to ryse,
Fro þe face of þe *folde* to flyȝe ful hyȝe; (524)

彼 (=西風) は干ばつで土ぼこりを舞い上げ、大地の表面から空高くに飛ばす。

folde は *OED* では *folde* の見出しで記載されている語であり、*field* と関連のある語である。*OED* は (1)「地面; 陸地; (人の住むところとしての) 大地」、(2)「国、地域」という定義を与えている。また、“in (on, upon) fold” はしばしば単なる補充句 (expletive) として用いられた。実際、*Gawain* での 10 回の使用例のうち、6 回は “vpon folde”, 1 回は “on the folde”、1 回は “on this folde” という句で使用されている。

この語は *Beowulf* でも *folde* の形で「大地」の意味で使用されており、また *OED* の最後の用例は c1470 年のものである。*OED* と *MED* に挙げられている用例は主に頭韻詩のものであり、主に頭韻詩で用いられた語であることが推測できる。

この語は *Morte Arthure* と *Alexander* でも使用されている。

molde

þer hales in at þe halle dor an aghlich mayster,
On þe most on þe *molde* on mesure hyȝe; (137)

その時、広間の戸口から恐ろしい騎士が駆け込んできた、この世で最も背丈が高いと思われる人物であった。

OED では *mould* の見出しで記載している語で、この *mould* は「沃土」の意味では今日でも用いられる語であるが、「地面、土地」の意味では今日では古語や詩語であり、またチョーサーによって使用されていない語なので、ここで取り上げることにする。

molde は OE の時代から 16 世紀にかけて見られる綴り。*Beowulf* では使用

されていない。*OED*によると、「地面」の意味は1000年頃から見られ、最後の用例は1624年のものである。「(人が住む) 大地、土地」の意味は1000年頃から見られ、現代では詩語である。*molde* は現代まで続いている語ではあるが、*Gawain* では4例中すべてが頭韻語として使用されており、また *Morte Arthure* では9例中8例までが頭韻語となっている。*The Destruction of Troy* などでも作品中の *molde* のすべてが頭韻語として使用されており、この *molde* の頭韻語としての使用が確立されていたことが推測できる。

この語は *Morte Arthure* と *Alexander* でも使用されている。

「広間」を表す同義語。

「広間」を表す語としては、*Gawain* では *sale* と *hal (halle)* が使用されている。*sale* はチャーサーには見られず、*hal (halle)* はチャーサーでも使用されている。これらにおいても、前者は頭韻語の割合が高く、後者のチャーサーによって使用されている語では頭韻語の割合が低いことが次の表から分かる。

単語	使用回数	頭韻語	非頭韻語	頭韻語の割合	語源
<i>sale</i>	7	6	1	86%	OE
<i>hal, halle</i>	18	8	10	44%	OE

sale

Thenne comaunded þe lorde in þat *sale* to samen alle þe meny, (1372)

それから城主は命を下し、一同を広間に集めた。

sale は OE *sæl* に由来し、古アイスランド語 *salr* (広間、部屋)、ドイツ語 *Saal* (広間、ホール) などと同一語源の語である。この語はゲルマン語から、フランス語 *salle*、イタリア語 *sala*、スペイン語 *sala* などのロマンス語にいずれも「広間、ホール」の意味の語で入り、これらが更に *salon, saloon, salle* (広間、ホール) などとして英語に入った。

フランス語からの借用語である英語 *salle* は今日でも使用されている語である。一方、*sale* の方は *Beowulf* でも *sæl* (ホール) の形で使用されている語であるが、*OED* の最後の用例が 1522 年のものであり、今日ではすでに廃語となっている。

OED による *sale* の定義は、「大広間、ホール; (王や貴族の) 館、宮殿、城; (たまたま) テント」である。ME の頭韻詩では “in sale” は折り返し句としてしばしば用いられた。

この語は *Morte Arthure* と *Alexander* でも使用されている。

それ以外の名詞

以上、主な同義語について見てきたが、*Gawain* で使用されているそれ以外の名詞で、チャーサーには見られず、かつ現代英語でも使用されていない語のうち、*Gawain* で 5 回以上使用されているものを拾ってみると、次のような語がある。

単語	使用回数	頭韻語	非頭韻語	頭韻語の割合	語源
bronde, bront	8	6	2	75%	OE
bur	5	5	0	100%	ON
burde	12	7	5	58%	OE
douth(e), douþe	5	5	0	100%	OE
Dryȝten	5	3	2	60%	OE
flet(te)	7	6	1	86%	OE
lote	11	5	6	45%	ON
rurd(e)	5	4	1	80%	OE
scharp	5	4	1	80%	OE

これらの語について簡単に見ていきたい。

bronde, bront (=sword)

And braydez out þe bryzt *bronde*, and at þe best castez. (1901)

そして輝く剣を抜き、野獣に切りつけた。

OED では *brand* の見出しで記載している語であるが、この語は今日「銘柄; 焼き印; 燃え木」の意味で用いられている語であり、*Chaucer* でも「たいまつ、燃え木」の意味で *brond* は使用されている。しかし「剣」の意味の用法は *Chaucer* には見られないので、ここで取り上げることにする。*Gawain* での *bronde, bront* の用例 8 個のうち、7 個が「剣」の意味で、1 回だけが「燃えさし」の意味で用いられている。

Borroff (p.70) によれば *sword* が *low alliterative rank* に属す語であるのに対して、*bronde (bront)* は *schafte* (槍), *scharp* (剣) などと共に、*high alliterative rank* に属す語であるという。*Gawain* では *bronde (bront)* の頭韻語としての割合は、上の表に見られるように特に高いというわけではないが、*Morte Arthure* では *brand (brond)* が 33 回使用されているうち、30 回は頭韻語であり、91% と確かに高い頭韻語の割合を示している。

OED によると *brand* は「(剣などの) 刃」を意味し、その「刃」の詩的用法として「剣」の意味を持つようになったということである。*Beowulf* でも *brond* は「燃焼、火」の意味の他に「剣」の意味で用いられている。「剣」の意味における *brand* は以来今日まで続いている詩語である。ただ、19 世紀にはロマンス作者たちが古語として散文でも使用した、と *OED* は述べている。

この語は *Morte Arthure* と *Alexander* でも使用されている。

bur (=blow)

And I schal bide þe fyrst *bur* as bare as I sitte. (290)

私はここに無防備で座って最初の攻撃を受けよう。

OED には *birr* の見出しで記載されている語で、今日でも *birr* という形で米語、スコットランド方言として、「勢い; 風力; 強打、攻撃; ぴゅーという回

転音」などの意味で残っている。今日の標準英語にはなく、またチョーサーによって使用されていない語であるので、ここで取り上げる。

この語は OE にはなく、ME の時期に古ノルド語 *byrr* (順風) から入ってきた語である。*OED* は「強い風、順風」、「(風などの) 勢い」、「突撃、攻撃; 激しい一撃」、「(物理的な) 力、激しさ」などの定義を与えている。*MED* では以上の他に「激しい感情」(*passion; a fit of rage; an outburst (of grief)*) の意味を挙げている。「順風」および「突撃、攻撃」の意味は今日では廃義であり、*OED* での前者の用例はだいたい 14 世紀に限られ、後者の用例も主に 14 世紀のものであり、最後の用例は c1440 年のものである。*Gawain* では *bur* は「一撃; 力」の意味で用いられている。

この語は *Alexander* では *bire* の形で使用されているが、*Morte Arthure* では使用されていない。

burde (=maiden; lady)

Gawan and þe gay *burde* togeder þay seten, (1003)

ガウェインとその美しい婦人は一緒に座った。

OED では *burd* の見出しで記載されている語で、13 世紀から 14 世紀にかけては *burde*, *bird* という形も用いられた。*OED* によると、その語源ははっきりしないということであり、OE の用例はなく、*Layamon's Brut* の用例が初出として挙げられている。*Layamon's Brut* では頻繁に使用されている語であるが、その後は北部、北中部の作家や頭韻詩で主に使用されたという。また、*MED* によると、ME 後期にはこの語の使用は主に頭韻詩と、脚韻詩の頭韻語に限られるという。

burd は *bird* (鳥)、*bride* (花嫁) などとも同一視され、それらの語と混同されることがあったという。Lester (p.93) は *burde* が *birde* (乙女) と *birthe* (子、子孫) と、そして多分 *bride* (花嫁) との混成であるかもしれないと述べている。

OED は *bird* の 1d の項で “a maiden, a girl” という定義を挙げ、*bird* はこの意味では本来は別語である *burde* と混同され、おそらくは *bryd(e)* (=bride) と

も混同された、と述べている。bird は現代英語の俗語では、“a girl, woman” の意味で用いられている。

OED は、burde について男性形の berne (戦士、男) に対応する “a poetic word for ‘woman, lady’” と定義し、この語が口語で用いられる語ではなく、詩語であったことを明示している。また、のちの用法では主に “young lady, maiden” を意味したとしている。

MED は birde の見出しのもとに別形として bird, burde, buirde, berde, brid などの形を挙げ、定義として「高貴な生まれの女性; 婦人、女官」、「聖母マリアを指す用法」、「高貴な生まれの男子; 若者; (キリストを指して) 幼子」などを挙げている。

この語は *Morte Arthure* では birde という形で使用されており、*Alexander* では brid(e) 形で使用されている。

douth(e), douþe (=assembled company)

Bi þat þe daylyzt watz done þe *douthe* watz al wonen (1365)

Into þe comly castel,

日が陰るころまでには一行は立派な城に入った。

OED では douth の見出しで記載されているこの語は、*OE* *duguþ* に由来し、*Beowulf* でも「家臣の集まり、軍勢」、「美德、男らしさ」の意味で用いられている。スコットランド方言などに残っている *dow* (～できる; 成功する、栄える) や、*doughty* (勇猛な) などと同一語源の語である。*Gawain* では「(集まった) 人々」((assembled) company) の意味で使用されている。

MED では、「力、富」、「男らしさ」、「善行」の意味では *ME* 初期までの用例しかなく、「従者たち」、「軍勢」、「人の集まり、人々」の意味では 14 世紀までの用例を挙げている。*MED* の用例から、「軍勢; 人々」の意味ではこの語が頭韻詩特有の語であると推測できる。

この語は *Morte Arthure* では使用されていないが、*Alexander* では使用されている。*MED* による限り、*ME* 初期の *Layamon's Brut* などを別にすれば、

14 世紀の作品では主に Gawain Poet の作品と *Alexander* に限られる語のよう
に見受けられる。

Dryȝten (=God)

On þe morne, as vch mon mynez þat tyme (995)

þat *Dryȝtyn* for oure destyné to deȝe watz borne,

Wele waxez in vche a won in worlde for his sake;

翌朝、主が我々の運命のために死すべくお生まれになった時を思うとき、
この世のすべての住まいで主のために喜びが増大する。

OED では *drichtin*, *drighten*, (短縮形) *dright* の見出しで記載されている語
である。この語は OE *Dryhten* に由来し、古アイスランド語の *dróttinn* (主人;
王; 神、主) と同語源である。

OE では「主人、君主」の意味でも使用され、*Beowulf* でもこの意味と「神」
の両方の意味で使用されたが、ME の時代の用法に関しては、*MED* は「主、
神、キリスト」、「(異教の) 神」という定義を与えているだけであり、ME では
「神」の意味に限られるようである。

MED で見る限り、広く使用された語のようではあるが、チャーサーやガワ
ーでは使用されていない。*Piers the Plowman* では *Driȝte* という短縮形で使用
されており、また、*Morte Arthure* と *Alexander* でも使用されている。*OED*
の最終用例は a1450 年のものである。

flet(te) (=floor)

þer fayre fyre vpon *flet* fersly brenned. (832)

広間では気持ちよい火が勢いよく燃えていた。

OED では *flet* の見出しで記載されているこの語は OE *flet(t)* に由来し、ド
イツ語の南部方言 *Fletz* (ホール、玄関の間) や北部方言 *Flett* (炉のある土間、
炉端) などとも同一語源の語で、英語の形容詞 *flat* (平らな) と関係のある語

である。*Beowulf*でも「床」、「広間」の意味で使用されている。*MED*は「(部屋、広間の) 床」、「(床を敷いた) 部屋、広間」、「住居、家」の定義を与えている。

*Gawain*では主に「床」の意味で使用されていて、“on þe flet” や “vpon flet” などの句で「広間 (ホール) で」の意味となる。

この語は *Morte Arthure* では使用されていないが、*Alexander* では使用されている。

lote (=sound; speech)

þus wyth lazande *lotez* þe lorde hit tayt makez, (988)

このように城主は笑いながら冗談を言って場を陽気にした。

lote は *OED* では *late* の見出しで、そして *MED* では *lote* の見出しで記載されている語である。OE には存在せず、ME の時期に古ノルド語の *lát* (pl.態度; 音) および *læte* (態度; 音) から入ってきた借用語であり、英語 *let* (～させる) とも同一語源の語である。

MED は「外観、態度、身振り」、「音、ことば、(複数で) 冗談」の定義を挙げている。*Gawain* では主に「音、ことば、(複数で) 冗談」の意味で使用されている。また、この意味の用例は *MED* では主に 14 世紀に限られている。

この語は *Morte Arthure* と *Alexander* でも使用されているが、前者においては「態度、表情」の意味でのみ使用されている。

rurd(e) (=voice, noise)

And wyth a rynkande *rudde* he to þe renk sayde: (2337)

そして鳴り響く声で騎士に言った。

この語は今日主にスコットランド方言として *rerd*, *erde*, *reird*, *raird* などの形で「騒音」の意味で残っている語である。*OED* および *MED* では *rerd(e)* の見出しで記載されている。OE *reord* (声、叫び) に由来し、古アイスランド語

rödd (声) などとも同一語源の語である。*Beowulf* では「ことば、声」の意味で使用されている。1400 年以降はほとんどもっぱらスコットランドで「音、騒音」の意味で用いられたと *OED* は述べている。

MED は「声、大声; ことば」、「叫び声、(動物の) 鳴き声」、「音、騒音、怒号」などの定義を与えている。*Gawain* では「声; 音」の意味で用いられている。

この語は *Morte Arthure* では使用されていないが、*Alexander* では reryd の形で用いられている。

scharp (=sharp blade; sword)

þat þe *scharp* of þe schalk schyndered þe bones, (424)

それで男の鋭い刃は骨を打ち砕いた。

scharp は今日でも形容詞として使用されている *sharp* の 13 世紀から 16 世紀にかけて用いられた綴りで、OE *scearp* に由来する語。*Gawain* では形容詞としての用法の他に「鋭い刃、剣」の名詞として使用されているので、ここで取り上げることにする。

OED は *sharp* の名詞用法として、(1)「鋭い武器、(特に) 小さな剣」、(2)「鋭い刃、剣の刃」の定義を与えている。これらの用法は今日では廃義あるいは古語である。14 世紀に始まる用法のようで、*OED* では両方の定義で *Gawain* からの用例が最初のものとして挙げられている。*Beowulf* では *scearp* (=sharp) は形容詞として使用されているが、名詞用法はない。

この名詞用法は *Morte Arthure* には見られるが、*Alexander* には存在せず、またチャーサーや、ラングランド、ガワーなどでも使用されていない。

形容詞、副詞

次に形容詞、副詞について見てみたい。形容詞が副詞形を持つ場合には、副詞形を含めて *Gawain* で 5 回以上使用されている 9 語を拾った。これらはチョ

一サーには見られず、かつ現代英語の標準語でも使用されていない語である。次の表では形容詞形と副詞形とを分けて記載した。

単語	品詞	使用回数	頭韻語	非頭韻語	頭韻語の割合	語源
athel, aþel	adj.	6	6	0	100%	OE
derf, derue	adj.	6	6	0	100%	ON
deruely	adv.	1	1	0	100%	ON
dreȝ, dryȝe	adj.	6	6	0	100%	ON
dreȝly	adv.	1	1	0	100%	ON
ȝep(e)	adj.	5	4	1	80%	OE
ȝeþly	adv.	2	2	0	100%	OE
rad, radly	adv.	8	8	0	100%	OE
schyre(e), schyire	adj.	11	11	0	100%	OE
schyrlly	adv.	1	1	0	100%	OE
sere	adj. adv.	8	8	0	100%	ON
þro	adj. adv.	7	7	0	100%	ON
þroly	adv.	1	1	0	100%	ON
wlonk	adj.	7	6	1	86%	OE

athel, aþel (=noble, splendid)

þerfore to answare watz arȝe mony *aþel* freke, (241)

それ故多くの高貴な騎士は返答することを恐れた。

OED では *athel* の見出しで記載しているこの語は OE *ædele* に由来し、同系の語がゲルマン諸語に広く存在し、ドイツ語 *edel* (高貴な)とも同一語源である。*Beowulf* では「高貴な、優れた」の意味で用いられている。この語の別形に *haþel* があり、これはすでに触れたように *Gawain* では「騎士」の意味の名詞として使用されている。

MED は (人に関して)「高貴な; 一流の」(noble; excellent)、そして (ものに関して)「見事な; 本物の (金); 貴重な (宝石); 敬虔な (祈り)」などの定義を与えている。

OED による形容詞としての最後の用例は c1450 のものである。

derf, derue, deruely (=doughty; severe)

‘Do way,’ quop þat *derf* mon, ‘my dere, þat speche,...’ (1492)

「ご婦人よ、そのような話はおやめください」とその勇猛な男は言った。

OED では *derf* の見出しで記載されているこの語は OE の時代には存在しなかった語で、古ノルド語 *djarfr* (大胆な) からの借用語である。*MED* によると、この語は主に北部方言および北部ミッドランド方言のテキストに現れるという。

MED は「大胆な、勇敢な; 勇猛な; 生意気な」、「強力な; 大きい(丘); 貴重な (宝石); 騒々しい (騒ぎ); 大きな (奇跡)」、「激しい、恐ろしい、残酷な; 痛々しい」などの定義を与えている。*OED* による *derf* の最後の用例は 16 世紀のものである。

副詞 *derfly* については、「大胆に; 激しく; 勢いよく; 素早く; ひどく」などの意味が *OED* に挙げられている。

この語は *Morte Arthure* と *Alexander* でも使用されている。

dreȝ, dryȝe, dreȝly (=enduring)

Hade hit dryuen adoun as *dreȝ* as he atled, (2263)

þer hade ben ded of his dynt þat doȝty watz euer.

もしそれが彼が狙ったように激しく打ち落とされていたなら、あの常に勇猛であった騎士はその一撃で死んでいただろう。

この語は *OED* では *dree, dreigh* [driː, driːx] の見出しで、*MED* では *dri(e)* の見出しで記載されている語である。今日でもスコットランド方言、北部方言

としての他、古語として残っている語である。チョーサーでは動詞形の *drye* (=dree 我慢する) は使用されているが、形容詞形は使用されていないので、ここで取り上げた。

OE の文献には残っていない語で、古ノルド語 *drjúgr* (持続する、豊富な) に由来する。

様々な意味を持つ語で、*MED* は「大きい、背が高い; (打撃が) 激しい; (戦士が) 強い、勇敢な」、「永続する; (道が) 長い、退屈な」、「難儀な; 陰鬱な、気の滅入るような」、「忍耐強い; (表情が) 変わらない」などの意味を挙げている。また、副詞形 *dreȝly* は「絶え間なく; 強く、真剣に」の意味である。

この語は *Morte Arthure* (副詞形のみ) と *Alexander* (形容詞形のみ) でも使用されている。

3ep(e), 3eþly (=brisk, bold)

Wyle Nw 3er watz so 3ep þat hit watz nwe cummen, (60)

þat day double on þe dece watz þe douth serued.

新年がまだ新しくて早々だったころ、その日には一座の人々に食卓で二倍のごちそうが出された。

OE の *geap* (曲がった、狡猾な) に由来する語で、*Beowulf* では「丸天井の、広々とした」の意味で用いられている。*Gawain* では *3ep(e)* が「大胆な、勇敢な」、「新鮮な」の意味で、そして *3eþly* が「敏速に、即座に」の意味で使用されている。

OED は *yep(e)* の見出しのもとに、「狡猾な」、「賢明な」、「機敏な; 大胆な」などの定義を与えている。*MED* は「機敏な」の意味から「若々しい」の意味が派生し、そこから比喩的用法として、*Gawain* に於ける新年の形容詞としての「新鮮な」の意味となると解釈している。この「新鮮な」の意味は *OED* には記載されていない。

これらは *Morte Arthure* と *Alexander* (副詞形のみ) でも使用されている。

rad, radly (=promptly)

And ay rachches in a res *radly* hem folȝes, (1164)

そして猟犬がいつもすぐさま突進して彼らを追跡した。

OED では *rad* の見出しで記載されている語で、形容詞と副詞の用法があるが、*Gawain* では副詞の用法のみが見られ、*radly* と同じ意味で使用されている。OE *hrad, hræd* に由来する語で、*Beowulf* では *hrædlíce (=quickly)* の形で使用されている。形容詞 *rad* に対応する副詞が OE *hraðe, hræðe*、ME *rathe* であり、その比較級が現代英語の *rather* である。*rathe* 形の方はチョーサーでも使用されている。

副詞としての *rad* と *radly* は共に「素早く、即座に」の意味である。

これらは *Morte Arthure* (*radly* のみ) と *Alexander* でも使用されている。

schyre(e), schyire, schyrly (=bright, white)

þe blod schot for scham into his *schyre* face (317)

and lere;

恥のため彼の輝く顔と頬にかつと血潮が流れた。

OED では *shire* の見出しで記載しているこの語は OE *scir* (輝く) に由来し、*Beowulf* でも「輝く」の意味で使用されている。同系の語に *shine* ((動) 輝く) や *sheer* (全くの; (麿) 輝く) がある。*Gawain* では「輝く、白い」の意味で、また形容詞の名詞用法として「肉、身」(*flesh*) の意味で用いられている。*OED* は、「輝く; (液体など) 澄んだ; 純粋な; (道徳的に) 清らかな; 全くの; 希薄な」などの定義を与えている。*OED* は、「輝く」(*bright, shining*) の意味では ME の頭韻詩において時には漠然とした “*beautifu, fine*” の意味の賛辞 (*epithet of praise*) として用いられた、と述べている。また、*shirely* は「明るく輝いて」の意味である。

これらは *Morte Arthure* (形容詞のみ) と *Alexander* でも使用されている。

sere (=separate)

Sere seggez hym sesed by sadel, quel he lyzt, (822)

騎士が下馬するあいだ、数人の人が鞍をつかんだ。

*OED*が *sere* の見出しで記載しているこの語は OE には存在しなかった語で、ME の時期に古ノルド語 *sér* から入った借用語である。*sér* は再帰代名詞 *sik* の与格の形で、元来 “for oneself” の意味であったが、そこから “separately” の意味の副詞となったものである。この語が英語に入ってから更に独自に形容詞の用法を発展させた。

Gawain では形容詞としては「個々の、別々の；様々な；いくつかの」の意味で、副詞としては「別々に」の意味で用いられている。

OED が、「多分方言を別とすれば廃語である」と記載していることから判断して、形容詞の方はかなり現代に近い時代まで用いられていた語であるかもしれない。

この語は *Morte Arthure* と *Alexander* でも使用されている。

pro, proly (=steadfast; fierce)

‘Wy! þresch on, þou þro mon, þou þretez to longe;...’ (2300)

さあ、さっさと打つがいい、猛々しい男よ、脅し文句が長すぎる。

OED では *thro, thra* の見出しで記載されているこの語は OE には存在しなかった語で、ME の時期に古ノルド語 *þrár* (頑固な、熱心な) から入ってきた借用語である。*MED* は *thro* の見出しで、「大胆な、勇猛な」、「怒った；獰猛な」、「(痛みが) 激しい」、「(火、川などが) 危険な」、「頑固な」、「(信念などが) しっかりした、変わらない」、「(死体が) 硬直した」、「熱心な、熱烈な」、「美しい、喜ばしい」などの様々な定義を与えている。*Gawain* では形容詞としては「不動の；猛々しい」の意味で、そして副詞としては「心から、熱心に」の意味で用いられている。

この語は *Morte Arthure* と *Alexander* でも使用されている。後者では *thra*,

thrally 形が用いられている。

wlonk (=noble; splendid)

Whyle þe *wlonkest* wedes he warp on hymself— (2025)

その間に彼はいとも立派な衣装を身につけた。

*OED*では *wlonk* の見出しで記載されているこの語は OE *wlanc*, *wlonc* に由来し、*Beowulf*では「誇り高い、大胆な」の意味で用いられている。*OED*は、(1)「高貴な、誇り高い、傲慢な」、(2)「すばらしい、立派な」の定義を与え、(2)については、後には特に頭韻詩で決まり文句 (a conventional epithet) として用いられたと述べている。*Gawain* では「高貴な; すばらしい」の意味で用いられている。この語に関して *MED* には主に 14 世紀の頭韻詩からの用例が挙げられている。

この語は *Morte Arthure* と *Alexander* でも使用されている。

以上、*Gawain* で 5 回以上使用されている語彙のうち、文中で通常強勢を受ける名詞、形容詞、副詞について概観した。強勢を受ける語は頭韻語として使用される場合もあれば、非頭韻語として使用される場合もある。もし特に意識せずにこれらの語を使用した場合、頭韻語、非頭韻語の両方に使用されるので、およそ 7 割程度が頭韻語となるのではないかと予想される。

最初に取り上げた「男、騎士」、「馬」、「大地」、「広間」を表す同義語の場合、現代英語では使用されておらず、かつチョーサーでも使用されていない語は、それぞれ 10 語、2 語、3 語、1 語ある。これらの計 16 語について見た場合、*Gawain* では全体で 300 回使用されており、そのうち頭韻語としての使用が 295 回であり、98% くらいの高い割合で頭韻語として使用されていることが分かる。Borroff が “Use in alliterating position only is associated with archaic and elevated stylistic quality, use both in alliterating and final position with colloquial quality.” (p.56) と述べているように、これらの語の多くが当時すでに古語であって、詩語として格調の高い文体を作り出すのに役立っていたこと

が覗かれる。一方、チョーサーでも使用されている語の方は口語であって、特に格調の高さを感じさせる語ではなく、したがって頭韻語、非頭韻語の両方に使用されたのである。

次に、以上の同義語以外の名詞については、チョーサーには見られない語で、*Gawain* で 5 回以上使用されている 9 語を取り上げた。これらの *Gawain* における全使用回数 63 回のうち、頭韻語としての使用回数は 45 回であり、頭韻語の割合は 71% くらいで、特に高いわけではない。これらの中には、Borroff (p.70) が high alliterative rank に属すとしている *bronde (bront)* (剣) があるが、この語の使用回数 8 回のうち、頭韻語として使用されているのは 6 回で、*Gawain* での頭韻語としての割合は特に高いわけではない。また、主に頭韻詩で使用されるとされている *burde* (乙女、婦人) についても、その使用回数 12 回のうち、7 回が頭韻語として使用されていて、頭韻語としての使用割合は決して高くはない。このように、たとえ詩語とみなされている語であっても、必ずしもいつも頭韻語として使用されるわけではないことが分かる。

形容詞、副詞でチョーサーによって使用されていない語で、*Gawain* で 5 回以上使用されている 9 語については、使用回数が全部で 70 回のうち、68 回までが頭韻語であって、非頭韻語は 2 語だけであり、頭韻語としての使用割合が極めて高い。

以上見てきたように、チョーサーによっても使用されている口語の語彙とは異なり、チョーサーには見られず、かつ *Gawain* での使用回数の多い語は、詩語や古語であり、頭韻語として使用される割合の高い語であることが分かる。そしてそれらの中には頭韻詩特有の語というものもあり、そのような語彙は頭韻詩以外で使用されることはほとんどなかったのである。

参考文献

- Andrew, Malcolm and Ronald Waldron, ed., *The Poems of the Pearl Manuscript* (University of Exeter, 1987)
- Barron, W. R. J., ed. *Sir Gawain and the Green Knight* (Manchester U. P., 1974)
- Borroff, Marie, *Sir Gawain and the Green Knight—A Stylistic and Metrical Study* (Yale U. P., 1962)
- Bosworth, J. and T. N. Toller, ed., *An Anglo-Saxon Dictionary* (Oxford U. P., 1898)
- Davis, Norman et al., ed., *A Chaucer Glossary* (Oxford U. P., 1979)
- Duggan, Hoyt N. and Thorlac Turville-Petre, ed., *The Wars of Alexander* (Oxford U. P., 1989)
- Gollancz, Israel, ed. *Sir Gawain and the Green Knight* (Oxford U. P., 1950)
- Hall, J. R. Clark, ed., *A Concise Anglo-Saxon Dictionary*, 4th ed. (University of Toronto Press, 1984)
- Holthausen, F., ed., *Altenglisches Etymologisches Wörterbuch* (Carl Winter, 1963)
- Klaeber, F., ed., *Beowulf and The Fight at Finnsburg* (Heath, 1950)
- Krishna, Valerie, ed. *The Alliterative Morte Arthure* (Burt Franklin, 1976)
- Kurath, Hans, ed., *Middle English Dictionary* (University of Michigan Press, 1957) (*MED*)
- Lehmann, W.P., ed., *A Gothic Etymological Dictionary* (E.J. Brill, 1986)
- Lester, G. A., *The Language of Old and Middle English Poetry* (Macmillan, 1996)
- Macaulay, G. C., ed., *The English Works of John Gower* in 2 vols. (Oxford U. P., 1901, 1979)
- Putter, Ad, *An Introduction to the Gawain-Poet* (Longman, 1996)
- Skeat, Walter W., ed., *The Complete Works of Geoffrey Chaucer* in 6 vols. (Oxford U. P., 1894, 1972)
- Skeat, Walter W., ed., *The Vision of William concerning Piers the Plowman* in 2 Vols. (Oxford U. P., 1924, 1961)
- Tatlock, John S. P. and Arthur G. Kennedy, ed., *A Concordance to the Complete Works of Geoffrey Chaucer* (Peter Smith, 1963)
- The Oxford English Dictionary Second Edition* on CD-ROM (Oxford U. P., 2009) (*OED*)
- Tolkien, J. R. R. and E. V. Gordon, ed., Second Edition revised by Norman Davis, *Sir Gawain and the Green Knight* (Oxford U. P., 1979)
- Zoëga, G. T., ed., *A Concise Dictionary of Old Icelandic* (Oxford U. P., 1910, 1975)
- 境田 進 訳『ガウエイン詩人全訳詩集』(小川図書、1992)